

# ロボットは「心」を持つことができるか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00061473">http://hdl.handle.net/2297/00061473</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.





スタディサプリ  
三賢人の学問探究ノート  
今を生きる学問の最前線読本

生 命 を



!

福岡伸一先生  
生物学



!

篠田謙一先生  
自然人類学



!

柴田正良先生  
現代哲学

究 め る

# 3

ロボットは「心」を  
持つことができるか？



柴田正良先生

1953年大分県生まれ。千葉大学人文学部卒業。  
中部大学国際関係学部助教授、金沢大学文学部教  
授などを経て、現在は金沢大学教育担当理事・副  
学長を務める（2020年4月より、金沢大学名誉教授）。  
専門は現代哲学。

# 人間と共に生きる ロボットには 「心」がなくちゃ!

SF映画で描かれるような、ロボットと人間が共に暮らす未来が現実になりつつあります。人間と共に生きられるロボットに求められる能力とは、どのようなものでしょうか。人間のいうことを正しく理解できるロボットでしょうか。それとも自由自在に動けるロボットでしょうか。

「人間の命令には、すべて背くことができる——それが人間と共に生きられるロボットの条件です」

そう語る柴田正良先生の専門は、ロボット工学ではなく、なんと哲学。哲学の

中でも、現代社会に生きる人間が直面する問題を、哲学の視点から解き明かす現代哲学という学問です。

「ロボットやAIという存在が人の世界に入ってくるとき、人間は倫理的、道徳的な問題に直面するんです。そのときに、人間に危害を加えてはならない、命令に背いてはならない、なんていう自律していないロボットではダメ。それでは逆に人間社会の中で共生することはできません」

人間とロボットが共に生きるためには、ロボットに「個性」と「自立／自律」が必要だ——そう考えた柴田先生が注目したのが、ロボットの「心」でした。

「ロボットが、心を持ってない理由はないんです」

高校時代に学生運動を経験し、バリケードやストライキで社会と闘う青年だった柴田先生。哲学者となった今、なぜロボットの心という現代ならではの問いと闘うことになったのでしょうか。

これは、「心」のしくみに興味を持った哲学者が、現代に渦巻く課題を極限まで追究した結果、ロボットに心を持たせることは可能なのかを考えるに至ったお話です。

# 誰も正体を知らない 「心」を哲学で考える

人間以外のものの中に心をつくれる？

私は哲学の研究者です。研究しているのは、ロボットについてです。

哲学という学問は、みなさんの日常生活には、あまりなじみがないかもしれませんが。ただか抽象的でよくわからないことを、難しい顔をした哲学者たちが「ああでもない」「こうでもない」と論じ合っている、そんなイメージを持っている人も多いでしょう。

哲学という言葉を辞書で調べると、「世界や人生の究極の根本原理を客観的・理性的に追求する学問。」(『精選版 日本国語大辞典』小学館) という説明が書かれています。何だかよくわかりませんね。例えば、「正義とは何か?」とか「愛とは何か?」とか、そういう抽象的な問いを深く考えて探究していくのが、一般的に哲学と呼ばれる分野です。

では、その抽象的なことばかりを考えるはずの哲学者である私が、なぜロボットの研究をしているのだろう、と不思議に思いませんか?

私が研究しているのは、ロボットの「心」についてです。ロボットは人間と同じような心を持つことができるかどうか、それが私の研究テーマです。SF映画の世界の話みたいに関心するかもしれませんが、現代を生きる私たちにとって避けることのできない、とても大切な問いだと私は思っています。

でも、「まず人間の心というものがどういふものかわからないのだから、それをロボットに持たせることは不可能だ」と思った人がいるはずですよ。たしかに、「人間の心とは何だ?」と改めて問われると、答えに迷いますよね。私は心の正体は脳の働きだと思っていますが、もっと神秘的な何かだと考えている人もいます。古代哲学では、心は心臓にあるなんて考える人もいたし、肝臓だ、いや他の臓器だなんていう話もありました。何が心をつくっているのかという問いは、哲学にとっては古代から続くテーマなのです。

**人間の心がわからないからロボットにもそれを持たせることができない、というならば、心の正体突き止めることさえできれば、それを人間以外のものの中につくりだすことができるはず、ということになります。** だから「ロボットに心が持てるか?」という問いは、



「人間の心とは何か？」という問いと表裏一体であり、非常に哲学的なテーマ設定なので。このふたつの問いが結びつくということは、人間の心が何であり、体とどう関係しているのかということ、ロボットを通して解き明かしていくこともできるはずだ、ということの意味します。哲学者である私がロボットを研究するのは、それが人間の心を解き明かすことにもつながっているから、というわけです。

### お掃除ロボから「家族ロボ」へ

今、ロボットはどんどん身近になっています。部屋を勝手に掃除してくれるロボットや、お店で簡単な接客をしてくれるロボットまで現実に登場するようになりました。

でも、ロボット掃除機は家族の一員でしょうか。ロボット掃除機は洗濯機や冷蔵庫の間であって、人間の仲間ではないという感覚を持っている人が大半だと思います。家族が病気になったり、亡くなってしまったりしたら大変な衝撃ですが、ロボット掃除機が壊れたからといって深刻な心の病になったという人の話は聞いたことがありません。今のところロボットは、人間にとって道具の延長にすぎません。

しかし、それはいつか変わっていくと私は思っています。

今こうしている間もロボットやAIについてさまざまな研究が行われ、その技術は日進月歩を続けています。私たち人間の生活の中にロボットという存在がごく普通に入り込む未来、それを想像することはそれほど難しくなくなってきました。

**ロボットがどんどん進化して、いろいろな役割を果たすようになったその先に、ロボットの最終形態として考えられるのは、人間のいろいろな意味でのパートナーになっていくという状態だと思います。**

パートナーというからには、すでに商品化されているロボット掃除機やAIスピーカーのような存在とは違います。家電や道具とし

てのロボットではなく、そのロボットそのものが誰かにとって唯一無二の存在となるような、家族の一員としてそこにいるような存在。そういうものに、ロボットはなっていないかなくてはならないし、なっていくだろうと私は思うのです。

夢物語のように聞こえるかもしれませんが。でも、私たちはすでに、よく似た存在を身近に受け入れています。人間ではないけれど、私たちの生活の中に入り込んで、かけがえのない唯一無二の存在として家族の一員になっているもの。それはイヌやネコなど、ペットとして飼われている動物たちです。彼らを家族の一員だといわれて納得しない人は少ないはずです。人によつては子どものようにかわいがり、亡くなったときにはその喪失感からペットロス症候群になることもあります。それは、まぎれもなく彼らが私たち人間にとつてパートナーとなっているからこそ起きることです。

人間でないものが生活の中に入り込んでいる、という点ではペットもロボット掃除機も変わりないはずです。けれども、ペットは人間のパートナーになれるけれど、家電はなれません。

当たり前のことのようですが、ロボットという存在を考えるときには、これが大きな手がかりになるのです。例えば、「ドラえもん」を思い出してください。彼は全身機械でできていますが、まぎれもなく野比家の一員です。野比家には洗濯機も冷蔵庫もあって、ドラ

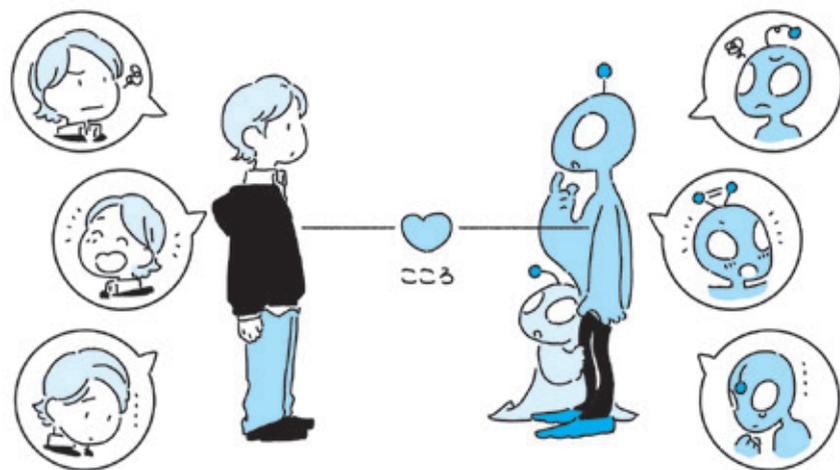
えもんの体の中身は人間よりもそちらに近いはずですが、彼をただの高性能な家電のひとつと知っている人はきつといたないでしょう。

**たとえ同じ機械でできていても、あるものはパートナーになれるのに、あるものはなれない。**生き物かそうでないのか、というシンプルなふりわけで済む話ではないのです。

### 宇宙人と一緒に生活するとしたら？

パートナーになれるかなれないかは何で決まるのかと考えると、やはり「心」というものがキーワードになってくると私は考えました。

「共に生きる人間以外のもの」という意味では、別にロボットでなくなつていいのです。例えば、宇宙人だったらどうでしょう。ある日、宇宙人がやってきて、地球と一緒に暮らすことになったと想像してみてください。私たちはきつと、何とかして宇宙語を翻訳し、いろいろなやり方で彼らと話をするでしょう。宇宙人の体のつくりが人間とはまったく違い、脳に当たる部分がまったく違うもの、まったく違うしくみだったとしても、「だから宇宙人は心を持ってないね」という話にはならないはずです。その場合、宇宙人は人間とは



別の方法、別の素材で心というものを実現していると考えるのが自然でしょう。

**つまり、心を持っていてるようにふるまうことができる相手であれば、それは「心を持っている」と言ってもよいことなのです。**

それが人間とはまったく違う物質でできた体で、まったく違うメカニズムを使って表に現れたものでも、心に変わりはありません。

つまり心という機能さえ出現させることができれば、その素材は何だっにかまわない、ということに私は思い至ったわけです。そう、ロボットの機械の体だってまったく問題ないのです。

「ロボットに心が持てるか？」という私が抱いた問い、これに対する私の答えは「YES」

です。むしろ、ロボットが心を持ってない理由が見つからないくらいです。

「ロボットに心が持てるか？」という問いは「人間の心とは何か？」という問いと表裏一体だといいましたが、改めて考えると、心って一体何なのでしょう。もちろん目に見えないし、脳の中でどんなことが起きて心を出現させているのかなんて、誰も確認していません。誰もその正体を知らないけれど、私たちは心について豊かに語るができます。

自分が外の世界からどんなことを感じ取ってどんな気持ちになるかとか、それをどう言葉で表現して人とコミュニケーションをとるか、といった部分を指して、心と呼ぶことが多いと思います。でも、何もわざわざ細かな定義をしなくたって、小説や詩の中で、人間は昔から心について大いに語ってきました。

つまり、私たちは自分たちの心がどんなものであるかは、よく知っているのです。**ただ、**

**その背後にあるはずの、心を生産させている物質や現象については具体的にはわからない。**心というものが発生して機能するとき、そこで何が起こっているのか、体という物質的なものとう関係しているのか、という問いを突き詰めた——。そう思った私は、機械的な体を持つロボットに心を持たせるとはどういうことか、という問いを明らかにすることが糸口になると考えたのでした。

# タマネギの皮をむくように 哲学をしよう

「えっ！ 俺卒業できるの!？」

私と哲学との出会いは、高校生のときにさかのぼります。1970年頃、時代は学生運動のまっただ中で、多くの大学で学生たちがバリケードを築いたりストライキをしたりして、大学や当時の教育のあり方に対して反発していました。私も活動に参加していました。当時の私は「世界ってどうなっているのか？ 何かおかしいんじゃないか？」という、今思えば小さな正義感に満ちていたのです。授業そっちのけで学生運動に参加していたものだから、停学を3回もくらいましたし、卒業するための出席日数も足りていませんでした。ですから、自分では高校を卒業できないと確信していたわけです。

**高校を卒業できないとなると、大学の受験準備をしたって無駄ですから、受験勉強などまったくせずに、哲学書ばかりを読みあさっていました。**ヘーゲルとかマルクスとか、学生運動家の中で人気のあった辺りですね。ところが、することもなく「このままどうしようか？」と考えていたら、高校3年生になって急に卒業させてもらえることがわかったのです。先生に呼び出されて卒業できるといわれ、「えっ！ 俺卒業できるの!？」と心底びっくりしたのを覚えています。最後の停学が明けたのは11月で、そこからあわてて受験勉強をし、何とか千葉大学に入ることができたのです。

今思えば、まわりが受験勉強で大変だった時期に、私ひとり受験というものから自由になって思う存分哲学書に没頭できたことは、とても大切な時間だったと思います。

最先端の問題を哲学で解く！

大学に入学してからも、私は哲学を学ぶことにしました。ところが、日本で哲学というと、哲学史を学ぶことがメインになっているのですね。特に大学の授業はそうです。カントがこういったとか、デカルトはこう考えたとか、昔の哲学者たちの書いた本を読み込んで



で思想を研究するのです。正直、そんなことばかり勉強しても、哲学をやっていることにはなりません。

哲学史を学ぶことと哲学を学ぶことはまったくの別物です。カントやデカルトが哲学史を勉強していたのかというと、そんなわけはありません。彼らは、当時の科学の最先端にあった問いを研究していました。

**哲学とは本来、科学の最先端に在るべきものだと私は思っています。** その時代に生きる人々が科学の最先端でぶつかる問題に取り組み、答えを示すことこそが哲学の役目なのです。哲学は、今私たちが生きるこの世界が、どんな価値観や原理によって成り立っているのか、その姿を描くことができる——私はそう思っています。

私の研究分野は「現代哲学」と言うのですが、この現代哲学という分野名は、哲学史を扱うことがメインになってしまっている今の日本の哲学と、一線を画すために生まれたものです。

では、今この時代の科学の最先端の問題とは何でしょうか。

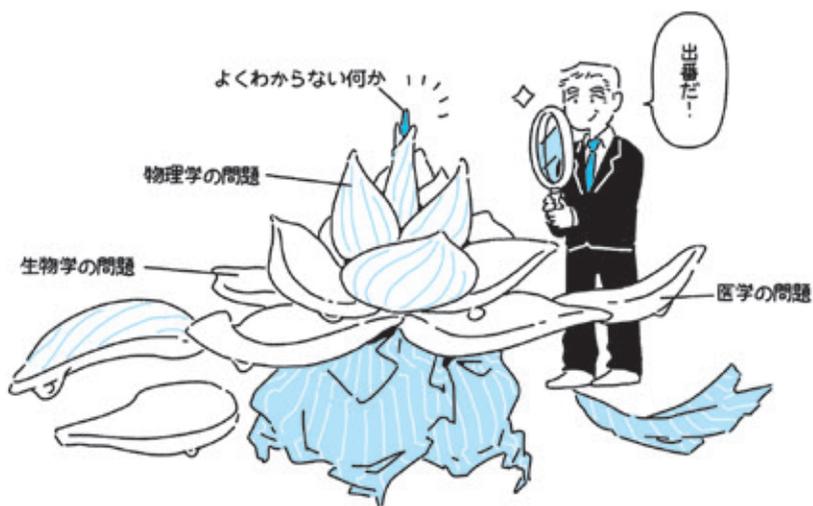
例えば、iPS細胞（人工多能性幹細胞）であらゆる臓器が自在につくれるようになったときに、人間の体をどこまでつくりだしていいのかという倫理の問題だったり、病気に強い遺伝子を持った人間をつくるというような遺伝子操作が可能になっている今、それがどこまで道徳的に許されるのかという問題だったり、同性同士の結婚が認められるようになってきた中で、同性のカップルの遺伝子を使い本来なら生まれることのなかった子どもを出産することの倫理的意味をどう判断すべきか、といった問題などもそうです。

人の生命の問題に、人間がどこまで手を加えていいのか——。そもそも、人間が人間であるために、そこで守るべき人間のアイデンティティ、「人間らしさ」とは何なのか——。

**科学の発展がくりだした、そうした新たな倫理的、道徳的価値の問題に取り組むのが現代哲学という分野なのです。**

現代哲学は、哲学史の研究からは一線を画し、最先端の問題に取り組んで、世の中にと

## 最後に残った謎に迫る



んどん発言をしていかななくてはならないと、私はそう思っています。

哲学というと、たいていの大学では文系に学部がありますし、文学部の中にある場合もあります。けれども、私が扱うような現代哲学は、むしろ自然科学系に近い部分があります。昔の偉大な哲学者が考えていたことの多くは、現代では生物学や物理学といった学問になっているのです。それでは、「結局、哲学って何なんだ？」と思う人もいるかもしれません。

私にいわせれば、哲学というのはタマネギの皮むきのような学問です。というのは、例えば「iPS細胞で人工臓器をつくる」というようなひとつの大きな課題、問題がそこにあったとします。そこからタマネギの皮をむくように、物理学や生物学、医学など他の学問で解決できる問題をそぎ落としていくと、最後にどうにも「よくわからないこと」が残るわけです。これは一体どういう問題で、どんな問いを立てて探究していったらいいのだろう、どう扱ったらいいのだろうと悩むような、よくわからないこと。他の学問では解くことのできない、最後に残るよくわからないことこそが、哲学の研究の対象なのです。

今も昔も、科学にとってよくわからないことは何かというと、それは価値の問題だと私

は思っています。私は、この現実世界はすべてのが物質的なものによって決定されていると思っています。しかし、道徳的な価値や倫理的に正しいということはどういうことなのか、それを物質的な現象として定義し解明することは不可能なんですね。

どういうことかという、例えば、ここに殺人を犯してしまった人がいるとします。

でもそれは、ある一方から見れば、長年民衆を苦しめていた独裁者を倒した行為で、正しい行為だったと解釈されるかもしれません。けれども、また別の人から見れば、殺されたのは自分の父親であり、どんな理由があっても許すことができない行為だということになるでしょう。

それでは、倫理的な正しさってどこにある

のだろうと考えたときに、状況や人物を物理的に分析することで、「正しいとはこういうことでした」と物理的にきれいに説明する、なんていうことはできないですよ。この倫理的な価値の問題を解き明かすのが、哲学の重要な役目のひとつなのです。

**他の学問で解けない価値の問題を対象とする以上、哲学の研究は最先端の科学と向き合わなくてはなりません。**科学が解決できない問題に対して、あらゆる状況をイメージして、あらゆる問いを立てて、その問いと向き合い続けるのです。私にとつては、それがロボットという最先端技術であり、「ロボットに心を持たせることはできるのか？」という問いになっていくのです。哲学は古い理屈を学ぶ難しくつまらない学問と思われがちですが、本当は、他の学問ではできない方法で最先端の課題を解決できるかもしれない可能性を秘めた学問なのです。

「知りたい、つくりたい」は止められない

哲学の基本的な考え方で、物理主義と呼ぶのですけれども、「世界は基本的には物質的なもの、物理的なものですべてができていて、すべてが決まっている」という考え方があり

ます。私は初め、この物理主義的な考え方はいやだなと思っていました。物質がすべてを決めるって、何だかいやだなと……。でも、「心」というものを研究して学ぼうち、私たちの世界というのは、どうやら神秘的な何か心が心とか精神をつくりだしているわけではなさそうだと、考えるようになりました。超常現象とか魂の作用だとか、そういうものでできているわけではない。やっぱり物質なのです。

人間には認知できないような、物質ではない何かしら神秘的な力を持ち出して心の問題を考える神秘主義が、ともすれば宗教的なものと結びつきがちなもの、「それはちよつと違う」と感じた大きな理由です。変な話、哲学と宗教が闘うと哲学がいつも負けるのです。哲学がどうやっても説明できないような問題に、宗教は「神」というものを持ち出して簡単に答えてしまう。そういうのはやっぱり違うな、と思ったわけです。

**この世界が物理的なものですべて決まっているとすれば、心にも必ずそれを支える物理的な現象があるはず**です。それって何なのか、どういう物理現象が心をつくっているのかという問いを突き詰めると、究極の形としてロボットという物体にどうやって心という機能を出現させるか、ということにたどり着くわけです。

ロボットの未来の話をしていると、SF映画の世界を想像して、知能や認知機能の点で

人間より優れた心を持つロボットの出現を、恐れる人もいるかもしれませんが。たしかにそれは人類にとって未知の存在ですし、そういったものの開発を法律や条例で規制することはできるでしょう。けれども、どんなに規制したところで、人間はいつか必ずそれをつくりだすと私は確信しています。

なぜなら、それが人間の本能だからです。もっと知りたい、もっと新しいものをつくりだしたいという知的好奇心は、本能的なものなのです。**心を持つロボットは、いつか必ず生まれてくるでしょう。**

そうであるならば、どうやって人間はロボットと共生していくべきかを考えなければなりません。

科学、特にテクノロジーは、際限なく自分を増殖させていくようなところがあります。人間の生き方を何をもたらすことになるのか。もしも限界をつくる必要があるとしたら、それはどのように考えていけばいいのか——。そういった「誰かが考えてくれるだろう」と思われていることを考えるのが、哲学者ではないかと思うのです。

人間社会の一員としてロボットを受け入れるには、ロボットはどんな存在でなければならぬのか、これこそが、最先端の科学の問題を扱う現代哲学の仕事なのです。

## 私たちの未来は 科学で解明できない 問題で山積み

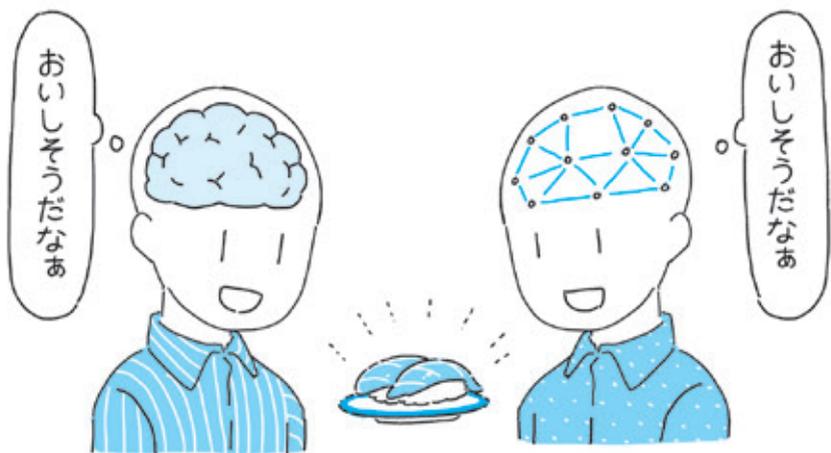
心だつて物質的なもののはずなのに……

くり返しになりますが、私はロボットが心を持つことはできると思っています。

私たちが生きるこの世界はすべてが物質でできている、と私は考えているのですが、ものどもの集まりですべてができているとすれば、どんなに複雑なものであれ、あらゆる現象は物質的な関係性で説明できるし、再現することもできるでしょう。

**「心」という現象だつて同じです。必ず物質的なものの作用があつて、感情や感覚が起きていると考えられます。**人間の場合は心という機能を果たすための物質——素材は脳だと

機能が同じなら、素材は関係ない!?



私は思っていますが、心とはどういう物理的なしくみでできているのかということは、科学的にはまだ説明できていません。こういうテーマにこそ役立つのが哲学的なものの見方なのです。ここでひとつ例を出して、心がどういう存在であるのかという、科学ではまだ説明できていない問題について考えてみましょう。

みなさんに、ずっと仲のいい友だちがいたとしましょう。それはもう、小学校・中学校・高校と、ずっと何年もつきあっているような、何でも話し合える深い間柄の友だちです。ある日突然、その友だちが交通事故で亡くなってしまいます。すると、亡くなった友だちの頭の中に、人間の脳ではなくてコンピュータのマイクロチップが詰まっていたことがわかったとしたら……。そのとき、みなさんはどう思うでしょうか。「ずっとだまされていた。ロボットだったんじゃないか!」と怒って友だちの死をまったく悲しまないかということ、きっとそんなことはありませんよね。

相手が自分にとって大切なパートナーであるとき、その脳の中のしかけがマイクロチップと電線でできたものなのか、あるいはグニャグニャの脳細胞でできたもののかは、正直どちらでもかまわない——何によってつくられているかというのは、大きな問題ではないのです。心としての機能を果たしてくれるならば、人間であろうとロボットであろうと、

その素材やしくみは何だつてかまわないということになります。心の本体がマイクロチップだつてまったく問題はありませぬ。つまり、**ロボットという機械的な構造の中にだって、心という機能を出現させることは可能である、という結論につながるというわけです。**

このように哲学という方法で考えてみると、心を持つロボットが人間社会でパートナーとして生きる未来が、ぐっと現実味を帯びてこないでしょうか。

さらにちょっと考えてほしいのですが、人間が、人間以外のものとパートナーとして生きるためには、それがどんな相手である必要があると思いますか? 74 ページでも例にあげた、イヌやネコを飼っている人は想像がし

やすいかもしれません。私も2匹のネコを飼っているのですが、彼らはまさしく私にとって唯一無二の存在、家族の一員です。なぜ、イヌやネコは人間のパートナーになれるのでしょうか。

彼らは別にAIのように非常に高いレベルで知性があるわけではありませんし、言葉をしゃべることもできません。特に私たちの生活の役に立つわけでもないし、多くの場合、むしろその世話に手間がかかるでしょう。でも、我が家の2匹のネコたちは、たしかに私のパートナーです。ではなぜ、イヌやネコは人間のパートナー的存在になれるのか。それはたんに彼らが生き物だから、という理由ではありません。私が注目したのは、彼らには個性があるということです。我が家の2匹のネコたちは、性格も見た目もそれぞれにまったく違う、この世に唯一の生き物です。だからこそ、他のネコで代替することはできない「大切なうちのネコ」なわけです。

共生する、一緒に暮らしていくためには、ロボットもそういう個性を持つ必要があると私は考えています。個性を持つロボットは、まぎれもなく家電とは一線を画す、家族や友だちといったコミュニティーのメンバーになることができるのです。**ですから、この個性というものを獲得するときに、ロボットにとって大きなターニングポイントになるはずなのです。**

### □ ロボットが自分で責任を取れるか

さて、もう一步踏み込んで「責任」という観点から個性について考えてみましょう。

先ほど、「コミュニティーのメンバー」という言い方をしましたが、これはつまり、今、私たちが生きている社会の一員ということです。社会の中で、私たちはさまざまなルールや決まりに従って生きています。犯罪行為をしないと、むやみに人を傷つけないとか、ある程度一致した道徳的な価値観の中で生活しているはずです。

それもそのはず、みんながみんな自分の好き勝手にやりたい放題に行動したら、共同生活なんて成り立たないからです。私たちは同じ社会の中で共に生きるために、個人の自由を制限して義務を負う代わりに権利をえて、生活しているのです。

この共同体の一員であるからには、自分の行動に責任を負わなければなりません。もしも、ルールを破ったり罪を犯したりしてしまったり、その行動について責任のある本人として罪に問われます。そうすることで、道徳的な社会は守られています。逆にいえば、この責任を負うことができないと、社会の一員として受け入れることは難しいということになります。

**個性を持たないロボットには、この責任を負わせるということができません。**なぜなら、彼らは差し替えが利くからです。他のものと代替不可能な、唯一無二の個体ではない。そうすると、同じものがたくさんあるうちのひとつにしかならないそのロボットに、個別の権利や義務を課して、その行動の責任を負わせるということはできないのです。

だって、たくさん同じものがあるなら、同じ状況に置かれたら隣の個体もまったく同じ行動をするはずですよ。そうすると、その行動の責任はどこにあるのでしょうか。ロボットに組み込まれたプログラムにでしょうか。ロボットをつくった人にでしょうか。少なくとも、たまたまその場においてその行動を起こしたそのロボットの個体に責任を求めることは難しいでしょう。

個性を持ち、もうその個体でないとダメ、他の何ものもそれと置き換えられない——そういうロボットになれば、その問題は解決されるわけです。この世に1体しかない、そのロボットのとった行動ならば、それはそのロボットの責任でしょう、というわけです。「責任」という点から見ても、ロボットを社会に受け入れるためには、個性が必要不可欠なのです。

個性の他にもうひとつ、行動の責任を負うのに必要なことがあります。それは、そのロボットが自律して行動できることです。自分の中からの欲求というか、自分自身の考えで行動を決定できること。これが必要不可欠なのです。

もしかしたらみなさんは、人間に危害を加えてはならない、命令に背いてはならない、そのふたつに背かない限り自分を守らなければならないという「ロボット三原則」を聞いたことがあるかもしれません。これは、アイザック・アシモフというアメリカのSF作家が1950年代に考えたもので、人間と安全に共生するためにはロボットの自律を制限しなければならぬ、という考えにもとづいています。しかし、私はこの三原則を持つようなロボットでは、逆に人間と共生することはできないと思っています。

ロボット自身が完全に自立／自律している、ということが共生の必要条件なのです。人間だって、例えば幼児や、何らかの病気などで意思決定を自分であることができない状態の人は、万が一、罪を犯してもその責任を問われることはないですよ。自分で自由に考えたり判断したりできない相手に、行動の責任を問うことはできないからです。ロボットだって同じですよ。**自立して、あらゆる命令に対していやだといえる、背くことができるという自由を持つことが、人間と共に生きるロボットの条件になると私は考えています。**

ですから、この個性と自立性／自律性を持ったロボットが誕生するとき、ロボットと人間が共に生きる未来が始まるのだと思っています。

# 軽く視点を 変えてみるのが、 哲学の始まり

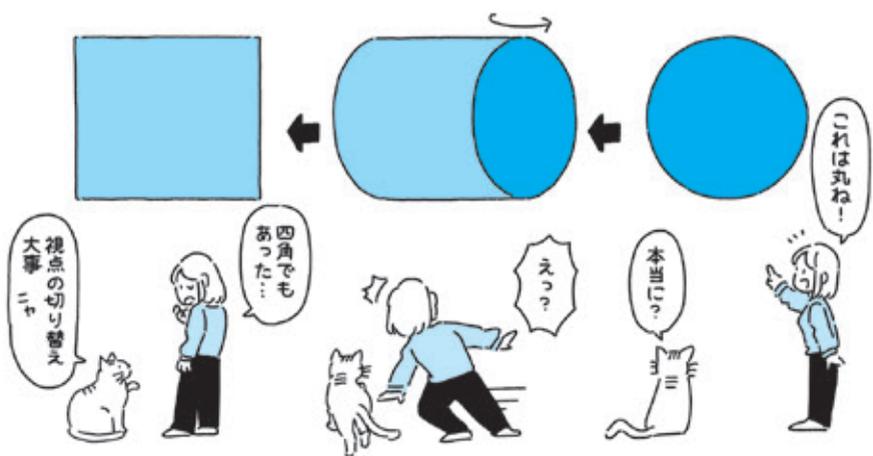
あなたの「白」は私の白と違うかも

哲学はとても領域の広い学問です。この世にあるありとあらゆる問題が対象になる、といってもいいと思います。他の学問では扱うことができない「よくわからないこと」を解き明かすことが哲学の目的ですから、どんな問題に取り組むにしても、必ず今ある常識という価値観の壁にぶつかることになるでしょう。だからこそ、哲学を学ぶ上で大事なものは常識を疑うことです。

常識というのはとても便利なもので、それに従っていれば物事をとてもスピーディーか



見えている景色を疑うことから始めよう



つ効率的に、判断して処理することができます。もちろん、日常生活はそれでまったく問題ないのですが、そこを「それって本当かな?」と問い続けるのが哲学のアプローチなわけです。

「視点を交える」と言うと、少し、かしこまりすぎている感じがするかもしれません。「異なる視点から考察してみる」なんて、大上段にかまえる必要はないんです。当たり前に見えることに、「でもそれって違うんじゃない?」とちょっと軽いノリで、ちょっと違う角度から眺めてみる。そういう思考の軽やかさが哲学には大切だと私は思っています。

**例えば、自分には自由意思があつて、自分の意思でさまざまなことを決定している多くの人は思っています。でもそれって本当でしょうか。**

そのときの体の状態や、直前の周囲の状況、想定される未来への懸念などの影響で、あなたは「こう決める」と最初から「決まっていた」のかもしれませんが。そんな可能性だけであるのです。あなたは今、自分の意思でこの本を読んでいると思っているけれど、それはあなたが朝起きて顔を洗ったときに、すでに「こう行動する」ということが決まっていたのかもしれない。そんなことはありませんか? そうならば、まだあなたは常識にとらわれてしまっているのでしょうか。

今、あなたが読んでいるこの本の紙の色は白色ですが、あなたが見ている色は私と同じ色ではないかもしれません。

「これは白ですね」「はい、白です」と確認し合ったとしても、私が白と呼んでいる色と、あなたの目と脳が認識している色が同じ色かどうかを確かめる術すべはありません。

私はもしかしたら赤い色を指して「白」という言葉を使っているかもしれないですよ。あなたが「白」という言葉で呼ぶと覚えている色は、本当は他の人にとっての青色かもしれません。

私は赤色を見ていて、あなたは青色を見ているけれど、うわべは「白ですね」と一致して話が済んでしまっているだけなのかもしれないのです。

どうでしょうか。屁理屈<sup>へりくつ</sup>で煙<sup>けむ</sup>に巻かれたみたいない気持ちですか？

いえいえ、そんなふ

うに視点を軽やかに切り替えながら物事を眺めることが、哲学の始まりなのです。

この視点を交えるというのは、意識的にやろうと思つてやると結構難しかったりするのですが、物事を考えているときに自然と誘発されることもあります。「あれ、これつてこういうふうにも見えるな」と、ふと気づくような感覚です。そういうふうには視点を越境できるといえるか、切り替えられる素地みたいなものは、日々の経験の中で積み重なつて育つていくものだと思います。

例えば、音楽でこういうふうな転調があつたとか、小説の中で話者のこんな交替があつただとか、そういうものが視点を切り替える力を育てます。絵画を見ることだって、画家の視点を疑似体験することにつながります。私は、ジャズやクラシックといった音楽にこの力をもらうことが多いのですが、狭いところで思考が行き詰まっているときにそれらを聴くと、やわらかな発想、強靱<sup>きやうじん</sup>な構成、壮大な世界観、遠い地平線……といった形で、音楽からえたイメージから自然と視点を切り替えることができます。他人の頭の中から生まれたものになまく切り替えの力を引き出してもらおうというのは、とても有効な手だと思つています。だから、たくさん経験を積む。それがいい発想や着眼点につながっていくと私は思っています。

### ロボットとの共生のあり方を考えよう

ロボットというものに興味を持つとは、ふたつのルートというか方向性があると思えます。ひとつ目は認知科学や計算科学などと呼ばれるような、ロボットにさまざまな能力はどう実現していくかという、技術的な研究の方向性です。これはもう、この方向に進む人には、行けるところまで行ってほしいと率直に思います。技術的な面に関していえば、いろいろなところでチャレンジする課題はたくさんあるだろうし、持てる力をどんどん使つて、新しいものを生み出してほしいと思います。

もうひとつが、ロボットと人間との共生についての話。私の研究テーマであるロボットの「心」についてだとか、ロボットと人間はいつか戦わなくてはならないのかとか、そうしたテーマです。86ページでもいった通り、ロボットの進化を止めることはおそらくできません。人間より高い知能や能力を持ち、人間より人間らしい心を持ったロボットはいつか必ず生まれてくるし、そうなればより切実に、人間はロボットと共生することを考えなければならなくなります。

例えば、最近よく話題になる「AIやロボットが人間の仕事を奪うのではないか」とい

## POINT

- 過去の哲学者の考えを研究するのではなく、現代科学が直面する倫理的・道徳的問題に挑む現代哲学を研究している。
- ロボットやAIが人間と共に暮らすようになる未来を考える。
- ロボットとの共生を考える中で、人間のアイデンティティはどこにあるのかが見えてくる。
- 科学技術の発展によって、人間が新たに直面する倫理的問題を解き明かそうとしている。



人間はどう生きるべきか、  
世界はどうあるべきか。  
哲学の視点を「新たな価値づくり」に  
活かそう！

う問題は、今のところ「人間が、仕事や富をどう分配するか」といった政治や経済の問題として語られています。しかし、もしロボットが、自分自身のために何かを要求し始めたとしたら、一体我々はどのようにするのか？ 同じ共同体の一員とするのか？

**そうした問題が出てきたときに、人間のアイデンティティって何なのか、人間は今後どういう存在として宇宙の中で生きていくのかという視野を持って、ロボットとの関係を考えてほしいのです。**

哲学は、「世界の姿」を示すことができる学問です。私たち人間が今生きているのはどんな世界なのか、それを描くことができます。

この現実世界がどういう世界なのかは、科学がすでに相当な部分を解明してくれていますし、常識というものも、私たちの社会を説明してくれています。しかし、科学や常識だけでは説明できない、倫理的価値とか道徳的な視点というものも私たちは持っています。そういったものをすべてあわせ持った、私たちの生きる世界がどんな場所なのか、それができるだけ整合的に描いてみせるというのが哲学の大事な役割なのです。

これから哲学を学ぶ人たちには、AIやロボットが盛んになる未来に、人間はどんなアイデンティティを持って宇宙に存在し続けるのかという視点のもと、簡単には答えの出ない問いや、形のないものたちを存分に描き出していつてほしいと思っています。

---

## もっと究めるための3冊

---



### ロボットの心

著／柴田正良 講談社

ロボットは「心」を持つことができるのか、という問いに対する柴田先生<sup>しばた</sup>の考え方をもっと知りたい人に。

哲学を通じて、現代人が抱える心の問題を考えていきます。



### 人間と機械のあいだ

著／池上高志 著／石黒浩 講談社

人工生命やロボットの技術が進化した将来、人間という存在はどうなるのか……。

気鋭の科学者がそれぞれの目線から科学技術と人間のあり方を語ります。



### 子どもの難問

編／野矢茂樹 中央公論新社

子どものとき一度は不思議に思ったような素朴な疑問に、哲学者たちが挑みます。

「哲学的に考えるとはどういうことなのか」を体感できる一冊です。

---